

一八八三年六月某日

ドツキネーシヨル
南神寺院において

聖ラーマクリシユナは、ドツキネーシヨル南神村の寺院、シヴァ堂の階段に坐っておられる。一八八三年ジヨイスト月の、まことに暑い日である。間もなく夕方になるだろう。氷、その他を持って校長がやってきた。ごあいさつをしてから、シヴァ堂の階段——タクールの足許に坐りこんだ。

〔J. S. ミルと聖ラーマクリシユナ。人間の限界——条件付けられた存在〕

聖ラーマクリシユナは校長に向かつて話される——

（原典註）

「マニ・マリツクの孫娘の夫がここへ来てね、何とかいう本を読んだらこう書いてあるそうだ——『神は非常に賢明であり全智であるということだが、そうは思えない。もしそうなら、こんなに不幸や悲しみがあるのはなぜか？ 人間が死ぬとき、すぐに死なせてやればいいのに、ジワジワ長らく苦しませて死なすのはなぜか？ 自分ならもつと、もつと、マシな世界を創つたらどうに——』」

校長は口をあげてタクールの言葉を聞いていた。黙って返事もできずにいると、タクールは続けてお話しになる。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて)あの御方を理解することなんか、出来っこないのになあ。このわたしだって、あの御方のことを悪く思うこともあるし、良く思うこともあるよ。あの御方の大造化現象マハイマキヤの中にわれわれは置かれているのだ。時には目覚めさせたり、時には無智のままおいて置かれる。いちど無智むちが退いたかと思うと、すぐ又戻ってくる。水藻に覆われた池に石を投げ込むと、ほんの僅かの間水が見えるけれど、たちまち水藻がユラユラ寄せてきて水の面を覆いつくす。

♪自分は肉体からだである〴〵と思っているかぎり、幸と不幸、誕生と死、病氣と心配、こういうものもあるんだ。これは皆肉体のもので、真我アトマンのものじゃない。肉体が減びたあと、あの御方は多分、もつとマシな場所に運んで下さるだろう——お産の苦しみの後で赤ん坊が生まれるようにね。だが、真我アトマンの智識ジュニヤナを獲たあととは、幸福も不幸も、誕生も死も、みんな夢のように感じるよ。

われわれに、いつたい何がわかる？ —シア(Iじ)の壺に、どうして十シアのミルクが入れられる？ 塩人形が海の深さを測りに海に入っていたら、もう報告は出来ないよ——溶けてしまうからね」

〔見神すればすべての疑問は解決する〕

夕暮れになった。神々への献灯アイトラティが始まっている。タクール、聖ラーマクリシュナは、自室の小寝台にお坐りになって宇宙の母を想っていらっしやる。ラカール、ラトゥ、ラームラル、キシヨリー・グ

(原典註1) ジョン・スチュアート・ミル(1806—1873)の自伝。ミルはイギリスの哲学者。

ブタ等の信者が来ている。校長は今夜、ここへ泊めていただく予定である。部屋の北側のペランダで、タクルは一人の信者に個人的な指導を与えておられる。「朝早くか、夜明け前に瞑想するといよいよ。それから毎日、夕拝の後にも……」などと、人格神を瞑想する場合、無形のもの、無形の場合、それぞれどのようにしたらよいかということをお教へておられた。

やがて、タクルが西の半円ペランダにお坐りになったのは夜の九時ころであった。校長が傍に坐っており、ラカールたちは部屋のなかをあちこち歩いてた。

聖ラーマクリシユナは校長におっしゃる——「なア、ここへせつせと通ってくる連中は、みんな自分の疑問を解決していくんだろかねえ。どう思う?」

校長「おっしゃる通りでございます」

折しも、ガンジスの岸辺遠く、一そうの小舟を漕いで行く人が歌をうたっていた。その歌声はアハタの音(原始創造の音＝オーム)のように甘く、はるかな空にまでひびき、河の堤を伝ってタクルのお耳に入ってきた。タクルはとたんに前三昧状態になられた。全身の毛が逆立っている。タクルは校長の手をとっておっしゃった——「ほら、ほら、毛が逆立ってるよ。わたしの体に触ってごらん!」彼はタクルの聖愛（プレマ）で満たされたお体に触れて、すっかり驚いてしまった。全身が至福で満たされている! そして思った。『全宇宙虚空に遍満す」とウパニシャッドに書いてあるソレが、聖ラーマクリシユナの体に響きとなって触れるのだろうか。これはブラフマンの音響（ひびき）にちがいない!』

しばらくたつてから、タクルは再び話しかけられた。

聖ラーマクリシユナ「ここへ来る連中はみんな、前世サムスカからの力を持っている。どう思う？」

校長「おっしゃる通りだと思います」

聖ラーマクリシユナ「アダルにも、前世から受け継いだ力があるよ」

校長「申すまでもないことで——」

聖ラーマクリシユナ「真面目に真っ直ぐに行けば、すぐ神様のところへ着く。それから道が二つある。正しい道と正しくない道裏道だ。正しい道に沿って行かなくてはね」

校長「仰せの通りでございます。糸にほんの少しケバが立っていても、針の穴に通りません」

〔すべてを放棄する事がなぜ必要なのか？〕

聖ラーマクリシユナ「食べ物に髪の毛が一本混じっていると、口から全部吐き出してしまおうしね」
校長「でも、あなた様がいつもおっしゃいますように、至誠かみをさとした人には不正なことは何一つ身に付きません。智慧の火が強くと燃えさかっていると、バナナの生木でさえ燃え尽きてしまいます」

(原典註2) 虚空アーカーシャの響き 人間のなかの雄々おしさ——ギター7・8——
この不滅なるものの中に ガールギーよ！ 虚空アーカーシャは遍く広がっている

——プリハッド・アールニヤカ・ウパニシャッド 3・8・11——